

研究結果

蒋介石と日本：北伐時期を中心に

蒋介石が日本との関係を持つようになったのは、1906年の日本留学であった。19歳の彼が外国である日本に渡ってまで学ぼうとしたことは、彼がいかに日本文化に憧れていたかを示している。日本を近代化のモデルとする彼は、当然中国と日本を緊密な関係にしたいと考えていたし、中国の近代化を日本の援助に基づき発展させていくことを希望していた。ところで、1920年代における日本の対中政策にとって、地域概念は無視できない存在であった。当時の日本において重要な地域の順位は、第一に満蒙地域であり、第二は華北地域、第三が華中地域であった。このような優先順位であったからこそ、1926年7月、日本政府は、華南地域から始まった北伐を、非友好勢力の軍事活動であると位置づけたにもかかわらず、基本的には無関心であった。当時、日本政府の主な関心は、華北地域勢力の中で親日的な勢力である張作霖を、いかにして温存させるかということであった。

ただし、北伐軍が華中地域に進軍するに従い、日本政府の同軍に対する関心も高まってきた。当初、日本政府は同軍を中国赤化の象徴であると認識していたため、いかに同軍の勢力を華中地域に封じ込め、華北と満蒙地域には進出させないようにするか思案し、対応策を練った。そして、北伐軍内の反共勢力と容共勢力あるいは共産勢力との戦いを誘導し、北伐軍の分裂を狙った。

日本政府が応援しようとする相手は北伐軍の総司令者・蒋介石であった。したがって、蒋介石が1927年4月12日に上海で反共クーデターを起こし、南京において新しい反共政府を樹立したのは、日本政府の勧告を受け入れたからであった。しかしながら、日本政府による蒋介石援助には、それなりの限界があった。つまり、蒋介石と張作霖両派とを和合させようとする日本政府には、蒋介石の地盤が華南、華中地域であり、満蒙は張作霖の地盤であると考えが念頭にあった。この考えを反映したものが、蒋介石の勢力が華北へ進出しようとした際に、蔣の勢力を封じ込めるため、「山東省における日本人居留民保護」という名目で、三回にわたって出兵した。

この三回にわたる出兵政策では、第一回目は、北伐軍が華北地域から退却したことにより功を奏したが、第二回目、第三回目において、蒋介石は進撃する道を迂回する方針を採ったため、北伐軍の華北への進出を止めることができなかった。

このような北伐をめぐる日本政府の対中政策は、北伐完了後にも様々な傷痕を残した。その中で、特に注目されるべき事件は、済南事件であった。事件の影響により、蒋介石の対日観は極度に悪化した。また、従来イギリスを主敵としてきた中国の排外運動が、日本を標的とするようになった。さらに、米英両国が国民政府に接近する立場から日本に批判的になったのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

黄自進<北伐に対する日本政府の対応>、山田辰雄主編《日中関係史論文集》所収、(東京：慶応通信出版社、2009年3月)

黄自進<北伐時期的蒋介石與日本：從合作反共到兵戎相見>(邦訳：北伐時期における蒋介石と日本：友から敵に変わった原点)、《国立政治大学歴史学報》、30期(2008年11月)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :

以上